



Title	カント「カテゴリーの体系」における判断表について
Author(s)	森, 芳周
Citation	メタフュシカ. 2001, 32, p. 113-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66652
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カント「カテゴリーの体系」における判断表について

森 芳 周

カントは『純粹理性批判』において、「判断表」、「カテゴリー表」、「原則の表」などのように、概念を「表」という形式で書き表している。そして、判断表、カテゴリー表、原則の表などの一連の表が一つの体系をなしていると考えられている。カントは、この体系を「カテゴリーの体系」と名づけている。

カテゴリーの体系における表には、量・質・関係・様相という区分がなされている。この区分は『純粹理性批判』におけるカテゴリーの体系の表に共通のものであるが、それにとどまらず、『実践理性批判』や『判断力批判』においても維持されている。したがって、このカテゴリーの体系の解明は、カント哲学における認識論だけの課題だけでなく、カント批判哲学全体の解明へとつながる。しかし、またこのカテゴリーの体系が正確に解釈されて来なかったという事実もある。たとえば、表の区分について「超越論的哲学のほとんど神秘

的なドグマ¹」という批判もある。批判哲学におけるカテゴリーの体系を正確に理解するため、『純粹理性批判』におけるカテゴリーの体系を明らかにしなければならぬ。判断表はカテゴリーの体系における一連の表のもっとも初めに位置するものである。したがって、この判断表の解釈は、カテゴリー表の導出だけでなく、カテゴリーの体系全体の解釈に関わる問題となる。

本論文の目的とするところは、カテゴリーの体系において判断表がいかなる位置にあり、いかなる意味を持つものなのか、このことを明らかにすることである。判断表に向けられた批判や、カント自身の説明の困難を検証し、カテゴリーの体系という観点から判断表を考えることによって、批判や困難に抗する。

以上のことを明らかにするために、本論文は次の手順をふむ。まず第一章で、『純粹理性批判』におけるカテゴリーの体

系について説明し、判断表がいかなる位置にあるかを見る。第二章では、判断表に向けられる批判を検証する。第三章では、前章でみた批判に答え、判断表の体系理念を明らかにする。最後に、カテゴリーの体系における判断表の位置をどのように解釈すべきであるかを示す。

一 カテゴリーの体系と判断表

カントは、『純粹理性批判』においては、「カテゴリーの体系」という術語を用いていない。『純粹理性批判』の初版出版後の一七八三年に出版された、『プロレゴメナ』の第三九節は、「純粹自然学の付録 カテゴリーの体系について」というタイトルがつけられている。そこでカントは、『純粹理性批判』の中で、カテゴリー表にしたがって、「表」という形で表すことのできる概念をまとめて記述している。第三九節での議論から、カントが展開しているカテゴリーの体系についての説明をしておく。

『プロレゴメナ』第三九節で、カテゴリー表の区分にしたがうとされているのは、次のものである。判断表、カテゴリー表、原則の表、無と何かあるものの表、合理的心理学、宇宙論の理念。これがカテゴリーの体系を構成するものとなる。ここからわかるように、カテゴリーの体系と呼ばれるものが、

分析論と弁証論の両方において議論されている。分析論は真理の論理学として『純粹理性批判』の肯定的部分とされ、一方、弁証論は仮象の論理学であり、否定的部分と言われる。カテゴリーの体系が分析論と弁証論という決定的な区別にも関わらず、そのどちらにおいても登場する。

カントは純粹悟性概念をアリストテレスにならってカテゴリーと呼び、その第一の意義は認識に関わる。カテゴリーつまり純粹悟性概念は、時間空間という感性的直観の形式に対して、思惟の形式であり、何かあるものが感性によって受容され、その表象に対して悟性概念のカテゴリーが適用されることによって經驗的認識が成立する。カテゴリーは、まずこうした認識能力としての機能を担っている。カントのカテゴリーの解釈としては、以上のような認識能力というだけでは不十分である。むしろ、カントのカテゴリーの意義を少なくとも見積もり、不合理なものと判断してしまうことがある。カントは、カテゴリーの体系について述べているこの『プロレゴメナ』第三九節の冒頭で次のように述べている。

哲学者にとつて願わしいこととして、以前に具体的に使用することによつて彼にはばらばらに現れていた多様な概念や原則を、アプリアリな一つの原理から導き出しこのような仕方ですべてを一つの認識へ統一できる場合以上のこと

はありえなう。(IV 322)

これに続けて、そういったばらばらに、つまり「抽象作用」や「相互の比較」によって集められたものは単なる「集積 (Aggregat)」でしかなく、それに対して、「分類の必然性」があるものを「体系 (System)」とよんでいる。カントがここで「体系」として意識しているものこそカテゴリー表のことである。このカテゴリー表は認識の過程で働く一機能という役割以上のものを持っているということがさらに示されている。『プロレゴメナ』第三九節の後半(第八段落以降 IV 325-326)で、次のように述べる。

さて、このカテゴリーの体系は、純粹理性それ自身のどの対象の取り扱ひもすべて、さらに、体系的にし、どの形而上学的考察も、それが完全になるようにしようとするならば、いかにして、いかなる審理の場を通じて (durch welche Punkte der Untersuchungen) 導かれなければならぬかということに、疑い得ない指示あるいは手引きを与える。この体系は、他のどの概念もそのもともたらされねばならない悟性の契機のすべてを尽くしているからである。(IV 325)

カテゴリーの体系が、あらゆる形而上学的考察を完全にするための手引きになるといふことがまず示されている。そしてこの手引きによって、原則の表、および「自然学的考察を超え出るはずの概念の多様な区分(『批判』三四四ページ、および四一五ページ)」、そして、「何かあるものと無という概念の多様な区分」の表が完成するのである。こういった表、つまり「体系的に」された純粹理性のあらゆる対象をカテゴリーの体系とよぶ。カントはこの体系の意義を次のように述べる。

この同じ体系はまた、そうでなければかの純粹悟性概念のあいだに紛れ込んだかもしれない、異種の概念のすべてを放逐して、どの概念にもその場所を規定するという点でも、普遍的原理に基礎づけられたどの真なる体系とも同様に、いかに賞賛されても十分ではないほどのその使用を示してゐる。(IV 326)

カテゴリー表を基礎とすることによって、その他の異種の概念、例えば経験的な概念あるいは形而上学的な概念を、そこから排除することが可能となる。そして、また正当と認められる概念にはしかるべき場所を規定する。カントはカテゴリー表を描くことによって、このような「批判」的な効用を

期待していたと言える。

さて以上がカテゴリーの体系についてである。このカテゴリーの体系という視点から判断表を解釈することがこの論文の課題である。先に見たように、カントはカテゴリー表の区分に従う一連の表をカテゴリーの体系とよんでいる。そのカテゴリーの体系の最初に置かれているものが判断表である。詳細については次章で取り上げることになるが、判断表の解釈を『純粹理性批判』におけるカント自身の説明から行おうとするならば、これまでになされてきた多くの批判に対抗して、判断表の意義を説くことはまず不可能であろう。カント自身の説明とは、例えば、判断表が「すでに仕上がった論理学者の仕事が目の前にあった」(IV 323)という一節である。この言葉は、判断表への批判がなされるときに、まず取り上げられる。なぜなら、判断表の区分というのは、ケンプ・スミスも指摘していることだが、カントに先行する論理学者たちの論理学の判断の区分のどれとも一致していないという事実があるからである。こういった批判のもとでは、もはやカントのカテゴリーの体系の基礎となつてゐる判断表を受け入れることはできないかもしれない。しかし、判断表の解釈として、たとえそれが当時の論理学者の判断表と一致するとは言えないとしても、カントの判断表の意義は失われてしまふとは考えていない。それがカテゴリーの体系という視点から

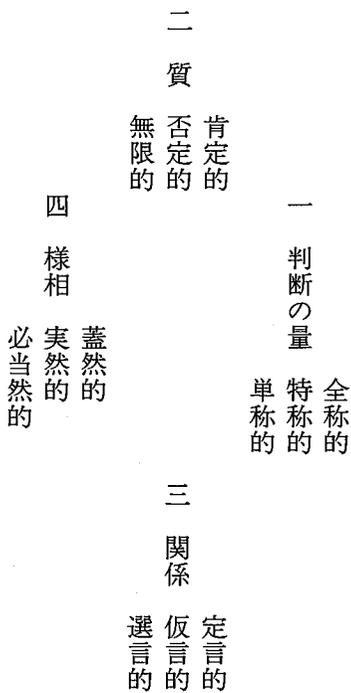
解釈することの意義である。カント以前の論理学者の判断表と比較して解釈するという方向性を否定はしないが、カントの判断表はカテゴリー表の基礎となつてゐるのであり、またカテゴリー表は原則の表、合理的心理学の表、宇宙論的理念の表などの基礎となつてゐる。こういったことから、カントの判断表をカテゴリーの体系という視点から解釈する可能性を考へる必要があるのである。

二 判断表批判の検討

なぜカントがカテゴリーの分類が判断表にあると考へたのかを、判断表の考察に入る前に述べておこう。そのためには、まずカテゴリーに課せられた機能を知っておく必要がある。「感性によつて我々に対象が与えられ、そして悟性によつてこの対象が考へられる」(A15/B29)という言い方がされる。これをより厳密に考へると、直観の能力である感性とは別に、その与えられた直観を思惟する能力が認識には必要であり、その思惟する能力である悟性は、様々な直観つまり表象を一つの共通な表象のもとへと秩序づける働きを行う。この働きがなければ認識が成立しないのだが、悟性はまた概念の能力とも言われ、様々な表象を一つの表象へとまとめあげるといふ機能は、概念の機能である。「悟性の認識、少なくとも人間

悟性の認識は概念による認識であって、直観的 (intuitiv) ではなく、論証的 (diskursiv) である」(A68/B93) また、次のようなこともカントは言う。「悟性は概念によって判断することの他には、いかなる使用もしえない。」(A68/B93) 「判断における様々な表象に統一を与える悟性の機能が、直観における様々な表象の単なる綜合に統一を与える。」(A78/B104) カントは、判断における統一の機能が、悟性における統一(概念)であると考え、あらゆる悟性の概念はすべて、判断に還元されると考えた。「したがって、もし我々が判断における統一の機能を完全に表示することができれば、悟性の一切の機能は残らず発見されうる。」(A69/B94)

そうしてカントは、判断一般から一切の内容を度外視した判断の形式として、判断における思惟の機能を「判断表」としてまとめた。(A70/B95)



カントは以上のような判断表を提示している。さてこの判断表の作成に関して、カントは「まったく欠陥がないわけではないが、すでに仕上がった論理学者の仕事が目の前にあった」(IV 323)と述べており、この表が伝統的な論理学つまりは一般論理学の判断の分類に基づいていることを明らかにしている。また、「判断表のこの分類は、本質的ではないが、いくつかの点で、論理学者たちの普通の方法と違っているように見える」(A70f/B96)と言うことから、一般論理学の判断の分類にカント自身が手を加えたと考えることができる。こういったことから、例えば、ケンプ・スミスの次のような批判が当然出てくる。

ケンプ・スミスは『純粹理性批判』の注釈書で、カントが A52-55 = B76-79 で行った論理学の分類を次のように図示している。



論理学についてのこうした区分は、カント自身の区分と一致している。ただし、カントが論理学の区分をするときには、論理学全体の中の超越論的論理学の位置づけはしていない。カントによる一般論理学と超越論的論理学との区別は

重要なことであるが、超越論的論理学が一般論理学などと並んで、論理学の一領域を占めるものなのかどうかは議論の余地があると思われる。しかし、この論理学の分類がケンプ・スミスの判断表批判の中心ではなく、これは単なる端緒にすぎない。

先にも述べたが、ケンプ・スミスは、カントの判断表と一八世紀の論理学者たちの判断の区分とを照らし合わせて、その不一致を指摘している。さらに形式論理学の規則と超越論的論理学の規則の差異を指摘し、形式論理学（一般論理学）の判断表を基礎にして、超越論的論理学の判断表を作成するカントの誤解を批判する。一部繰り返しになるが、カントは判断表について、「まったく欠陥がないわけではないが、すでに仕上がった論理学者の仕事が、私の目の前にあった。それによって、私は、純粋な悟性機能の完全な表を、それらの機能はまだすべての対象について無規定ではあったが、示すことが可能となった」(IV 323)と述べている。しかし、ケンプ・スミスによると、形式論理学は分析判断を扱い、超越論的論理学は総合判断を扱うのだから、その場合、二つの判断の間には思考の様式の差異があるので、単純に参照できないはずである。形式論理学の判断はdiscursive thinkingであり、超越論的論理学の判断はcreative thinkingである。この両者の思考はそれぞれ異なった源泉から生じている。総合判断を担

うcreative thinkingは「構想力の能力の所産」(A78/B103)である。そして、discursive thinkingとcreative thinkingの間に、何らかの一致点を見出せるのなら、形式論理学の判断表を参考にして、超越論的論理学の判断表を作成することは妥当だが、この二つの思考の活動には、一致する働きを証明できない。したがって、ケンプ・スミスはカントの判断表が誤解に基づいていると批判する。

ケンプ・スミスの判断表批判は、まず、カントの判断表がカント以前の論理学者の判断表のいずれとも一致していないということと、そしてまた形式論理学の判断表を参照して、超越論的論理学の判断表を作成するという着想は、根本的に誤りであるというものである。この問題をどのように解釈するかは、カテゴリー表と原則の表との関係、カテゴリーの図式化の解釈に大きな影響を与える。また感性の条件を超える概念へのカテゴリーの展開を考える上で重要になってくる。

このケンプ・スミスの判断表批判に反批判を加えているのがペイトンである。カントは形式論理学は思惟一般の形式であり、我々に悟性の必然的普遍的規則を与えるの一貫して主張している。ペイトンによると、「どの注釈者も―特にこの国(英国…筆者注)では―形式論理学は我々に分析判断の形式のみを与え、総合判断の形式を与えないと繰り返し言う。カントがそのような考えを持っていたという証拠はまったく私に

は見出すことはできない。」つまり、形式論理学の扱う判断を分析判断へと制限することを誤った見方だとしている。discursiveに対する語は直観的 (intuitive) であり、直観的思惟とは直接的なものであり、discursive thinkingは間接的思惟である。また、discursive thinkingとは概念的思惟 (conceptual thinking) である。こうして、ペイトンは「あらゆる人間の思惟、有限な思惟は概念的であるので、必然的にdiscursiveである」と考える。

そして、ケンプ・スミスのような、カントの判断表には形式論理学の判断と超越論的論理学の判断が混在しているという批判に対して、判断表の論理学に対するペイトンの結論は、カントの判断表はdiscursive thinkingを扱っており、そこには総合判断であろうと分析判断であろうとその区別に関わらず、「思惟一般」「判断一般」がその考察の対象になっているというものである。しかし、そうすると、判断表は『純粹理性批判』や超越論的論理学の課題であった「アプリアリな総合判断はいかにして可能か」という問題の総合判断に焦点があたっていないという批判が考えられるのではないだろうか。しかし、判断表に関して言えば、そういった批判は当たらない。なぜなら、すべての批判には、それらが間接的思惟である限り、なんらかの総合が含まれているからである。「すべての判断が総合的である」ということではない。仮に分析判

断であっても、例えば、そこには主語と述語の総合は存在している。判断表の論理学は、こういった意味での総合の分類が問題となっているのである。

このケンプ・スミスとペイトンの対立が再び露呈する箇所として取り上げられるものに、図式機能の章の評価の差異がある。ケンプ・スミスは図式論が不必要なものであると考え、ペイトンは逆に図式論を高く評価する。私には、この対立の根源が判断表の解釈の差異にあるように見える。ケンプ・スミスは、カントの判断表は超越論的論理学における総合判断の表であるべきだと考えている。そうすると、判断の諸契機は、ケンプ・スミス自身が言っているのだが、ある「実質」をすでに持っていることになり、原則を予期させるものとして解釈される。したがって、そこから導出されるカテゴリーはその超越論的演繹が行われ具体的に直観の多様への連関が示されるならば、図式化は必要なくなる。むしろ、図式化のあとに判断表の議論があるべきだと考えている。それに対して、ペイトンは判断表を総合判断の表に限定せず、単に総合あるいは結合の規則の表であるとして、またカテゴリーは純粹カテゴリーであると考えるので、カテゴリーの超越論的演繹が行われても、個々のカテゴリーの感性化が述べられる図式機能の章は重要な意味をもつ。『純粹理性批判』の記述に忠実であるべきならば、ペイトンの議論を尊重しなければなら

ない。また、カテゴリーが体系として形而上学的概念へと向けられるということを考慮すると、カテゴリー表は純粹カテゴリーの表でなければならぬ。カテゴリーと魂・世界などの形而上学的概念との関係は第三章で見ることになるが、たとえ否定的な仕方でも、カテゴリー表に従って、表としての表示が可能であるならば、カテゴリー表が感性的実質をすでに前提としている概念の表と考えることは許されない。つまり、判断表が図式化の後にくるべきならば、カテゴリー表は原則の表との関係のみを示すが、そうではなく、カテゴリー表は原則の表だけでなく、合理的心理学・宇宙論的理念の表の手引きともなるべきだからである。

三 判断表の構成規則

判断表の諸契機についての考察に入る前に、さらに判断表の完全性への批判についても注意をしておきたい。ケンプ・スミスとペイトンの対立は、私が本論文で対象としている体系としてのカテゴリー、つまり経験へと制限されつつもそれを越えていくカテゴリーという解釈に大きく影響を及ぼすのだが、判断表にはまた別の大きな困難が存在している。それが、よく言われる「寄せ集め」という批判である。例えば、ストローソンは、「我々は、論理的形式に関する限り、論理学

者がどのプリミティブを選択するかはまさしく選択の事柄であるという困難に直面する」と述べる⁶⁾。これは、一例を挙げれば、仮言的形式と選言的形式を用いれば、否定を使うことによって相互に定義可能であるからである。このように、カントの判断表があらゆる判断を完全に網羅したものであるとは言えないという批判がある。こういった批判に対しては、もはや反論する余地は残されていないであろう。

しかし、そうであるからと言って、判断表あるいはカテゴリー表を捨て去るのでは、議論を進めることはできないし、こういった批判が常にカントに浴びせかけられていたことが、カテゴリーの体系の正しい把握の障害となっていた。プラントはこういった批判にさらされる判断表の価値をさらに積極的に問いうるようになるために、次のような決意を述べている。

『純粹理性批判』の関連する記述に向けられた我々の解釈は、すでに方法的理由から、判断表を『純粹理性批判』の Hauslogik、場合によっては超越論的哲学の Hauslogik としてしか理解できない。⁷⁾

Hauslogik とは、判断表の論理学は『純粹理性批判』やその他の著作のただで通用する論理学という意味である。より

積極的に言うならば、カント自身が独自に構想している論理学の体系とも取れる。実際、カント自身も判断表について、その完全性は証明されないと述べている。この判断表から始まるカテゴリーの体系がどのような意図の下で構想されていたのかを解明する私の試みは、判断表の不合理な点を指摘することは、確かに必要なことではあるが、それで事足りりとするのではなく、*Hauslogik*として判断表が、一連の表へと通じるカテゴリー論の構想の下で作成されたと考えられるならば、その判断表の*Hauslogik*はどのような規則を持ったものなのかを詳しく見ていく。

ここでは、判断表の四つのタイトルおよびそれぞれのタイトルの三つの下位区分がどのような規則を持つものなのかを検討する。カントは、さきに挙げた判断表を作成するに際して、「まったく欠陥がないわけではないが、すでに仕上がった論理学者の仕事が目前にあった」(IV 333)と述べ、この表が伝統的な論理学つまりは一般論理学(形式論理学)の判断の分類に基づいていることを明らかにしている。また「判断表のこの分類は、本質的ではないが、いくつかの点で、論理学者たちの普通の方法と違っているように見える」(A70f/B86)と言うことから、一般論理学の判断の分類にカント自身の手を加えたと考えることができる。このことから、先に見たような、分析判断と総合判断の混在というようなケンプ・

スミスの批判が出てくる。しかし、カントは、カテゴリーに関して、それは経験へと厳しく制限されていると言いながらも、「カテゴリーは、思惟においては我々の感性的直観の条件によって制限されることなく、無制限の領域を持つ」(B166)としている。それゆえ、カテゴリーは図式あるいは原則へとのみ向けられているのではない。カテゴリーを体系として捉える場合にはこのことを考慮しなければならない。つまり、カテゴリーがそこに基づいているところの判断表の理解は、経験(感性)への適用と超感性的領域への関係との両者が可能となるような解釈でなければならない。したがって、前にも述べたが、私は、ケンプ・スミスの言うような判断表の論理学が総合判断のみを扱うべきであるという説には同意しない。このことを念頭に置いて、次に判断表の具体的な解釈に入っていくことにしよう。まず最初に、判断表の、量・質・関係・様相という四つのタイトルの意味を問い、その後判断表の個々の諸契機を扱う。

判断表の四つのタイトルについてだが、このタイトルはカントの「表」に一貫している。しかし、カントはタイトルに関して明確な説明をしてはいない。しかし、合理的心理学についての表で、「なるほど、私たちは、カテゴリー表において示されている通りの、カテゴリー相互のさきの秩序(Ordnung)をかえることはないであろうが、しかしここでは(中

略)カテゴリーの順序(Reihe)を逆にたどっていくであろう」(A344/B402)と述べられていて、表には元来、順序が存在しているというような説明をしている。

これに関して、私はブラントの解釈に従う。ある判断を単純な形式S ist Pというように定式化した場合、ここに主語(S)および述語(ist P)という要素が存在していることを容易に見て取ることができよう。この要素が判断を構成している。ところで、量のタイトルの下での諸契機を見ると、全称判断・特称判断・単称判断があり、それぞれ具体的な命題で言うと、「すべてのSはPである」・「いくつかのSはPである」・「このSはPである」、という判断を示している。そうすると、ここで、量のタイトルは主語に関する判断の様式であることがわかる。同様にして、判断の質は「ist P」(述語)に、判断の関係というのは主語と述語および判断相互に対する規定である。そして、最後に「特殊な機能」(A74/B99)とされる様相のタイトルが付け加わる。このように考えると、表のタイトルの順序の謎も解くことができる。

つぎに、より詳細に、判断表のタイトルと個々の契機を順に説明していこう。主語に関する判断様式としての量タイトルの下の判断についてだが、全称判断・特称判断・単称判断の分類は、カントによると、全称判断および単称判断は伝統的な論理学の区分にしたがっているが、単称判断は伝統的に

は全称判断と同一視されてきたと述べている。(A71/B96)つまり、単称・全称の両判断とも主語概念の外延がすべて述語概念に妥当しているという点で同一だからである。しかし「単に認識として(bloß als Erkenntnis)」(A71/B96)この判断を比較すると、この二つの判断は量の見地から区別されるとされる。この区別から何を読みとることができるだろうか。まず、やはりカントが量については、判断における主語概念と述語概念との総合という観点ではなく、主語概念のみに焦点をあて、その量(数)を扱っていることがわかる。そして、さらに「単に認識として」という観点をを用いて、伝統的論理学の判断の分類に新たに単称判断を付け加えていることに注意しなければならない。このことについては、四つのタイトルすべての説明の後で論述する。とにかく私はここで、判断表の量のタイトルの下では、主語の量化という「総合」がなされていると結論づける。

次に質のタイトルの下での判断に移ろう。ここでは肯定判断・否定判断・無限判断という分類がなされている。肯定判断および否定判断は伝統的な区分に一致している。そこに無限判断が付け加わる。無限判断は「Sは非Pである」と定式化される。カントのあげる例では、「靈魂は不死である」という判断が示されている。この判断は「論理的形式に従えば」(A72/B97)肯定判断に数えられるが、「超越論的論理学にお

「ついで」(A71/B97)あるいは、「認識一般の内容に関しては」(A73/B98)区別される。ここでもやはり、主語と述語に関して、主語の肯定なのか主語の否定なのかという形式論理的な規定性から離れて、述語における主語の外延の設定という認識論的な要素が入っている。

関係の判断に関しては、このタイトルそのものが一般論理学において異質である。カントは関係というタイトル自体には言及していないが、定言的・仮言的・選言的という判断の三分類について、「第一の判断様式では二個の概念だけが考察され、第二の判断様式では二個の判断が考察され、また第三の判断様式では二個以上の判断が対立関係において考察される」(A73/B98)と説明している。ここで、定言判断が二つの概念、仮言判断が二つの判断、選言判断が二つ以上の判断の関係であることがわかる。こういった関係についてさらに説明を加えるならば、「SはPである」という定言判断は質のタイトルに数えられている肯定判断と同じ定式だが、肯定判断では、その定式においては、SとPは交換可能である。それに対して、定言判断は「すべての人間は死ぬ」という判断において、主語に対する述語の規定つまり「死ぬ」ということが「すべての人間」を規定することを表現していると考え、その場合、SとPは交換不可能な関係にある。また、仮言判断は、「命題Aならば命題Bである」と定式化したなら

ば、これは、命題Bに対する命題Aの規定であると言える。ここでも重要なのは関係が不可逆であることである。そうすると、選言判断は「主語Yは選言肢AあるいはBあるいはCである」という定式の下では、主語Yに対して選言肢Aが選択されるならば、選言肢BおよびCが排除されることになり、選言肢Bが選択されると、AおよびCが排除されることになり、それぞれの選言肢は別のそれぞれの選言肢を互いに規定しあっていると説明できる。それをカントはそれぞれの判断について「a 述語の主語に対する関係、b 理由の結果に対する関係、c 区分された認識と区分によって生じたすべての選言肢相互の関係」(A73/B98)と表現している。

様相の判断は特殊な位置にある。これは、後の合理的心理学で扱われる表でも同様に、特殊な扱いを受ける。この様相の下でなされている判断はいかなる規則を含むのか、そして量・質・関係のカテゴリーとはどのような関係にあるのか。カントは様相の判断について、「判断の内容にはなにも付け加わらず、思惟一般に関する繫辞(Copula)の価値にのみ関係する」(A74/B100)また、「三つの命題すべては、順次に悟性と結合する」(A76/B101)と述べており、ここでカントが考えている総合あるいは結合は判断と判断する悟性との総合であろう。蓋然的・実然的・必当然的という判断は、判断の構成要素ではなく、量・質・関係という要素によってすでに形

成されている、ある判断に対して下されているいわば統制的な原理と言える。

ここまで量・質・関係・様相の判断それぞれについて説明してきた。そのそれぞれの解釈は、量は主語の量化、質は述語の規定、関係は主語と述語あるいは判断と判断の関係性、様相は判断に対する悟性の側での規定といった総合が具体的に考えられる。このように、ある判断が行われている際の、判断のあらゆる側面を重複することなく、分類したものが、四つのタイトルである。そして、判断とは我々の思惟によっているということから、この判断の規則は思惟の規則へとそのまま置き換え可能であるということ、この考えからカテゴリー表が導出される。したがって、この判断の結合規則がカテゴリーの機能を指している。カテゴリー表は原則でもなく形而上学でもなく、直接的には判断表がその機能の本質を示す。

四 限界点としての判断表

最後に、この判断表がカテゴリーの体系の中で、どのような位置を占めているのかを説明しておこうと思う。判断表に対する考察の方法としてこれまで行われてきたのは、一八世紀の論理学との比較による判断表の諸要素の歴史的な起源か

らの探究、あるいは現代の論理学の原理からのカントの判断表の批判的な考察などである。しかし、カント自身のカテゴリーの体系という意図から判断表を考察することも必要である。カントにおいては、判断表は論理学の区分を示しているのではあるが、単に論理学にのみ関わる問題ではない。

原則の表、無の表などを決定する原理としてはカテゴリー表が考えられていたが、そのカテゴリー表の構成原理を規定するもの、そして個々のカテゴリーの結合原理を示すものが判断表となっている。判断表がなければ、カテゴリー表は砂上の楼閣に過ぎない。カテゴリー表は理性概念の表や『実践理性批判』の自由のカテゴリー表までもその射程に入れている。その体系の基礎として判断表があることを考えておかなければならない。

判断表の諸契機の説明で、伝統的な論理学の形式によらない判断を入れるときに、「単に認識として」(A71/B96)、「超越論的論理学においては」(A71/B97)、「認識一般の内容に関しては」(A73/B98)といったコメントが付されていた。これは、ケンプ・スミスが指摘した異種の論理学の判断の混在を示すのではなく、カントが論理学の判断を、自分自身の観点から構成し直していることを示している。「超越論的論理学においては」というのは、超越論的論理学の構想の先取りを示し、それ自体が総合判断の混入を示すものではなく、また

「単に認識として」や「認識一般の内容に關しては」といった曖昧な表現や判断表の完全性は証明されえないということには、我々は、どうしてかは明確に説明できないが、現にこれこれのように判断をしている、そして、我々はその判断の契機の根拠をどこにも求めることはできない、このような見解が表れていると考えられる。つまり、カテゴリーの体系において判断表は一つの限界として考えられている。

注

- (1) N. K. Smith, A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason", 1918. 2nd ed., 1923, p. 190.
- (2) N. K. Smith, a. a. O., p. 193. 例えは、カントの判断表における「連言判断」の欠如などが指摘される。
- (3) 山本道雄「先験的論理学の構想をめぐる諸問題」四三頁（『神戸大学文学部紀要』第二五号、一九九五年、所収）。この山本はカントの「先験的論理学」の構想は一般論理学とは無縁のところにあることを指摘している。「先験的論理学」は『純粹理性批判』以前は、存在論の問題として構想されていたもので、後に『純粹理性批判』の「分析論」で形を変えて展開されることになったと述べている。
- (4) H. J. Paton, Kant's Metaphysic of Experience, 1936. 2nd ed., 1951, I, p. 213.
- (5) H. J. Paton, a. a. O., I, p. 216f.
- (6) P. F. Strawson, The Bounds of Sense. An Essay on Kant's Critique of Pure Reason, 1966, p. 80.
- (7) R. Brandt, Die Urteilsstafel. Kritik der reinen Vernunft A67-76 : B92-201 (Kant-Forschungen, Bd. 4), 1991, S. 38.

(おうち)さまか 臨床哲学・博士後期課程)